い、答えはすぐに出なくても問い続けなくてはいけないと思いました。

農業と福祉の融合「ユニバーサル農園」

障害者との出逢いで、農業と福祉を融合することで農業を活性化するユニバーサル園芸という活動が生まれました。誰でも参画することのできる農業をデザインすれば、高齢者から子ども達まで、誰でも役割をもって働ける場が誕生します。多くの方々が参画する農業は知恵が集まり元気になります。汗を流して田畑を耕せば心と体の健康にも繋がるかもしれませんし、食料の自給率も向上することでしょう。ユニバーサル農園は、農業が産業の核になることを目指しています。

今までの農業に福祉というキーワードを融合した時、今までの農業よりもよくならなくては融合する意味がありません。福祉が産業のなかでハンディになるのではなく、プラスの効果を生み出すことに価値があるのです。

心耕部とは農業のやり方を変えるための部署

障害者が所属する心耕部という部署があります。健常者の従業員さんの採用が決まると、会社は「この仕事をお願いします」と依頼をしますが、心耕部に所属すると「あなたはどんな働き方をしたいですか」と会社が要望を聞きます。障害者が農園で働くことができるように会社が農作業形態、仕組みを変えるのです。なぜそんな面倒なことをするのかと疑問に思う方もいるでしょう。ユニバーサルデザインの考えの基本は、「人」です。作業する人を中心に作業をデザインしていくことで、新たな作業方法やビジネスの誕生を狙っているのです。障害者がひとり農園にやってくると、農園のなかで新たなものが一つ誕生します。この構造は既存の農業を変革していくキーワードとなるのです。

障害者によって無農薬の農場が誕生

現在、農園では知的障害者7人、身体障害者4人、精神障害者9人、高次脳機能障害者1人が働いています。また、特例子会社や就労移行B型施設との作業委託の取組みを含めると30人の障害者が農業を行っています。この30人のお陰で、30個以上は農場内に変化がおきたことになります。いくつかの事例をご紹介します。

ある知的障害者の女性がいました。掃除ができましたので、他に適した仕事ができる間、農場内の掃除をお願いしました。彼女の丁寧な掃除のお陰で農場に草がなくなり、農場は綺麗になりました。そして、それと同時に農薬が減りました。草がないお陰で害虫が減り、定期的に農薬を散布する回数が減ったのです。掃除をすると農薬が減るという実態を知った私達は、掃き掃除を機械化し農場全体に掃除機をかけ、虫を吸取り、無農薬の農場づくりに挑戦しました。掃除機は、ゆっくり動かした方が虫がたくさん捕獲できますから、障害者の作業にも適しています。オリジナル掃除機ができあがり、現在では無農薬の野菜づくりができるようになりました。障害者と出逢わなければ、今でも農薬の力を借りた農業形態を変えることはなかったと思います。障害者の方々がゆっくり丁寧に仕事をしてくださることで、今までの農業のやり方を大きく変えることができ、お客様にも喜ばれるという「三方良し」の構図が成り立ったのです。

また、「姫ちんげん」という商品で、福祉の得意分野、生産工程を細分化するノウハウを導入したことで、年間20作も栽培出来る水耕栽培システムを構築することもできました。この生産は心耕部のみで行い、5年間で黒字部門をつくりあげました。

障害者（福祉）は企業活動にとってハンディか？

昨年、日本産業カウンセリング学会において京丸園の事例研究を発表させていただきました。一年に一人ずつではありますが雇用を続け、現在、障害者雇用率は34％。障害者が企業活動に本当にハンディであるとするなら農園の経営は下っていくはずです。しかし、実態は10人の家族経営の時から売上は4倍となり成長拡大することができました。一事例ではありますが、障害者は企業活動にとって決してハンディではないということは証明できたと思います。

とくに低迷する日本農業においては、福祉というキーワードは面白いのではないでしょうか。そして、農業分野でいろいろな方々が働けるようになれば、地域福祉のあり方も大きく変わるのではないでしょうか。